女性医師
就業支援
相談窓口

Vol.2

相談員が聞き歩き

「いばらきで活躍する女性医師インタビュー」

リレー

県西総合病院　院長
中原智子（なかはら さとこ）先生

両立の心得

様々なライフイベントのステージにおいて困難があったとしても、「あともう少し！」の気持ちがあれば将来的には自分自身のキャリアアップに繋がるはずです。

≪略歴≫

1980年	筑波大学医学専門学群卒業 筑波大学附属病院
1981年	第一子出産
1984年	第二子・第三子（双子）出産 県西総合病院　小児科立ち上げ
1985年	筑波大学附属病院
1986年	県西総合病院　小児科
1987年	第四子出産
2005年	県西総合病院　副院長
2014年	県西総合病院　院長 現在に至る

県西総合病院　中原智子院長にお話を伺いました。
大学病院での研修後、小児科医として、ご自身が生まれ育った桜川地区の地域医療を支えてこられました。平成26年４月に４代目院長として就任。
４人のお子さんの母であり、おばあちゃんでもあります。

先生のこと
『医師を志した頃そして今』

実家は農家で、高校２年生のころ、親戚に医師がいて働いている姿に影響を受けました。小児科医として地域での勤務を選んだのは、かけがえのない命をその場で助けることと、より患者に近い場所で、生まれてから成人になるまで成長する人生を見守れることに魅力を感じたからです。

それから県西総合病院の小児科を立ち上げて30年余り、生まれ育ったこの場所で医師を続けています。桜川・筑西地域では小児救急体制を整えるための資源が乏しく、医療機関同志の輪番体制もとれない状況の中で、休日・夜間を含めた小児診療を365日常勤2名で行っています。

雨引山楽法寺

近年では道路網の発達により近隣の高度救命施設へのアクセスは格段に良くなりましたが、地域の皆さんの健康を守り、信頼と安心の医療を提供するためには課題が残ります。

旧関東鉄道筑波線雨引駅前

桜川市観光協会 fb ページより

代々の院長がこの場所で築いてこられた歴史を引継いで「地域の医療を守る」ことが重要と感じています。現状では、医師不足や加速化する少子高齢化など非常に厳しい状況におかれていますが、これまで通り、患者さんひとり一人の生活と思いに心を寄せることを忘れずに、全人的な医療を継続することを目指しています。大変と感じても、地域で生まれた子供たちを、赤ちゃんの時から成人するまで一貫して成長を見守れることが何よりの喜びです。

私が医師として勤務を始めた当初は、地方では患者さんからみれば「医者といえば男の先生」でしたから、主治医だと名乗っても「お医者さんはどこですか？」といわれるほど女性医師の認識が薄かった時代です。今では、若い時診ていた患者さんがお子さんを連れて診察に来てくれます。「住民課」から「歩く戸籍係」に特化しています。

街中どこへ行っても手を振ってくれる子供たちやその家族がいて、元気な笑顔を見せてくれます。早朝の庭先で通りがかりにとりたて野菜をおすそ分けしてくれたりもします。

そのような何気ない日常の出来事が、地域医療に携わってきたからこそ味わえる最高の喜びです。「地域医療は楽しい！！」と声を大にして言います。

趣味は料理と読書とガーデニングです。どれも忙しい日々の喧騒を忘れて心が「無」になります。とは言いましても仕事が趣味というくらいほとんどお休みがないので、早朝や移動中などすきま時間を利用しています。1 年を通じてパンジーやビオラ、ペチュニアなどの花を育てています。無心になれるので、咲いたあとの花ガラ摘みが大好き。

趣味のガーデニング
ご自宅の庭の風景

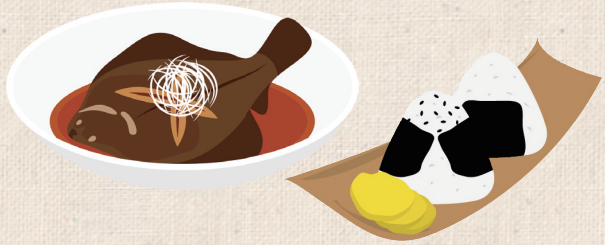
家族で出かけた時に旅先の駅の花壇で花ガラを摘もうとして…子どもたちに呆れられたこともありました。

『子育て今昔』

卒業の年に同級生で同じ医師である夫と結婚し、翌年から 6 年間で双子を含む 4 人の子に恵まれました。最初は二人とも別の大学病院勤務でしたから、お互いの勤務先の中間に住まいを借りて義母に通ってもらい育児を助けてもらいました。日中はほとんど母任せでしたが、料理は好きでしたし苦にはならなかったので食事はできる限り自分で作りました。家事育児に夫はあまり頼りにはなりませんでしたが、「おにぎり」と「魚の煮物」「おかずの盛り付け」は夫の出番です。その三つに限っては私よりセンスが良いということでしょうか。私が握るおにぎりはまん丸で大きくソフトボールのようなんです！！

今は大家族の料理を作るということがなくなり、手順を忘れてしまいそうなので、たくさん作って職場にもっていってみなさんと一緒に食べたりしています。

実現はしていませんが、子育て中の職員の夕食半準備持ち帰りサービスを考えたこともあります。仕事が終わってから買い物をしたり、あわただしく夕ご飯の準備をするのは大変でしょう。自分の経験もあるので、若い人たちを少しでも楽にしてあげたいと思います。



子どもが高校生になった頃、私が小学校の行事に参加できなかったことを突然口にされた時には「どうして今頃？」と思いましたが、その当時の子どもの気持ちに想いをいたらせなかったことが申し訳なく、切ない思いでいっぱいになりました。けれども、その切ない思いが日々の仕事の原動力になって頑張れていることも確かです。

私の出産当時は今のような便利なサービスはありませんし、育休制度さえ整っていませんでした。私の世代より上の活躍している女性医師の先輩方にアドバイスをいただきながら、その当時で使えるものは何でも使って乗り越えました。

多くの女性医師が働く今では、それぞれのライフイベントを充実させながら働き続けるためのサポートはたくさんあります。賢くつかってほしいと思います。

女性である私たちにも「家事や育児は女性の仕事」という思いが多かれ少なかれあると思うのです。パートナーとともにその意識から一歩踏み込んで、お互いを気遣い協力し合うことが大事だと思います。女性医師の夫は医師の場合が多いので特に。育休・授乳休暇部分休業等上手に使って家事育児がシェアできるといいですね。

院内病児保育室
「ひまわり」

当時私のロールモデルとなった先生方とは今でもつながっています。「若草姉妹の会」と称して集い、日常の他愛ないおしゃべりから仕事の話まで、生涯を通し現役で医師という仕事を続け、更なる活躍の力を蓄えるためにお互いを称え励ましあっています。

兄弟や家族が協力して祖父・実の父母・義父それぞれを在宅介護で見送り、現在は成長した子どもとともに暮らし、お世話になった義母の介護をしています。

様々なライフイベントのステージにおいて困難があったとしても、「あともう少し！」の気持ちがあれば将来的には自分自身のキャリアアップに繋がるはずです。

「使えるものは何でも使って！」常に次のステージのキャリアを描きながら医師の仕事を続けてほしいと思います。

ご自身の経験から
『これからの女性医師支援のあり方』

私の研修医時代は筑波大学附属病院での研修が始まって間もないころで、6 年間の研修医期間中に産休を取ることになりました。研修医も少ない時期でしたので困られていたと思いますし、自分自身研修は十分だったのか考えることもあります。3 回目の出産では大学勤務ではなかったので，産後だけ代替えをいただき、結局産前休暇はほぼなく出産に至りました。

医師を休む、やめるということは私自身全く考えませんでしたが、夫や義理の母は、あきれていたかもしれません。

研修医期間中の出産・育児は、研修する本人も、受けるほうも大変だと思います。専門医取得後というと 30 歳近くになってしまい、何人か子供がほしい場合には、高齢出産や育児・subspecialty を含めた専門医・認定医取得といった点で問題が出てくるように思います。

女性医師の働き方について、研修医制度全体として考えるべき問題であるとも思います。

また、女性医師側も、利用できる保育や家事の補助等はできるだけ利用して研修時間を調整し、本来の実力を十分に発揮して、社会に生かしていただきたいと思います。

県西総合病院
Kensei General Hospital

県西総合病院 HP
http://www.kensei-hospital.or.jp/

茨城県医師会
女性医師就業支援相談窓口

Facebookもチェック
fb.me/ibaraki.dr.women
https://www.facebook.com/ibaraki.dr.women/

029-241-7467　0120-107-467
029-241-7468　i-dr.support@au.wakwak.com
http://www.ibaraki.med.or.jp/women/